

風景の歴史的推移—河川を中心に—

山梨大学大学院医学工学総合研究部 ○北村 眞一

Historical Change of Landscape of Rivers and Cities, by Shinchichi KITAMURA (school of Sustainable society studies, University of Yamanashi)

1. はじめに

人為と自然による国土の造形の歴史を文明史と呼ぶ。人間の行為を人為（人間社会及び人間が意図した自然による環境変化）とし、人間以外の行為を自然（地球や生物による地球上の環境変化）とする。風景変化の原因は、人為と自然及びその協働であり、原因として、（１）デザイン技術（改变の設計・生産技術）、（２）思想・社会・経済（改变の社会経済的役割）、（３）精神・文化・継承（改变の評価、解釈、受容）が挙げられる。風景史（景觀史）は文明史の視覚的側面である。

2. 文明による地表の改变

文明史を概観すると、まず狩猟採取生活や地球上に現人類が拡散し、灌漑農業・牧畜が開始され、食糧余剰が生まれ、古代都市がメソポタミアで BC.5000 年頃に成立した。神殿・法・行政・政治・住宅・工業をもった都市は、1500 年頃に新大陸発見でジャガイモ、トウモロコシなど農業生産が拡大し、中世・近世都市を経て 1800 年頃の産業革命で近代都市が成立した。そして 1900 年代の資源（石油）・エネルギー・情報革命で文明は飛躍的に発展した。時代と共に環境の改变は著しくなり、運河、道路、植林、農地、都市など地球上での人為の及ばない環境はほとんどなくなった。

3. 我が国の河川と都市の近代の風景の改变と将来

江戸期に風土の素材を用いた封建都市が成立した。建築技術は木材の軸組、土壁、藁や瓦の屋根であり、土木技術は木杭と板（柵工）、石積（石畳、石段）、網籠（蛇籠）、生きた樹木（水防林）、土（道、畦、堰堤）などの天然の素材であった。明治元年（1868）からの近代化以降に、御雇い外国人などによって産業革命の

技術が輸入され、高度な素材の加工による技術（鉄、ガラス、コンクリートなどの素材と力学）が徐々に国土造形に利用され、今日に至った。

河川・農地・都市を見ると、利水が先行し治水が後を追いつき、利水と土地開発がある段階に達すると治水への要求が高まったとされる（小出，1970）。江戸期には河川の瀬替、放水路、分離・分流などにより、流域の開発がおこなわれた。近代化でダムや堰、合口などの水資源開発と管理合理化が進み、農業に加えて発電・上水・工業用水の需要対応が伸びた。明治 40・43 の水害以降、流域の治水と並行する低湿地開発により都市化・工業化が進んだ。工事は機械化し、河川や農業用水路も、護岸は石積みからコンクリート、鋼矢板などへ移り、工業化低湿地開発は水質汚濁と都市水害をもたらした。治水面では、狩野川（1958）、伊勢湾（1959）、カスリーン（1977）台風などの水害により、高潮対策堤防、高堤防が都市と河川を隔てた。都市では道路や建造物は徐々に変わりつつあったが、関東大震災（1923）・第二次大戦戦災（1945）とその復興、戦後の人口増と NT 開発で大きく転換した。今日は高規格堤防と都市再開発一体化の事業が進む。一貫して人間中心のアメニティ思想に基づき整備・継承されたが、将来は、資源・エネルギー制約、人口減から自然再生の整備への重点化が望まれる。

4. 参考文献

- ・川西宏幸（1996）、総論都市と文明、講座文明と環境 4 都市と文明、朝倉書店。
- ・小出博（1970）、日本の河川 自然史と文化史、東京大学出版会